

論考

九州大学所蔵二十卷本『三国志伝』について

中川 諭

一

九州大学附属図書館に『三国志演義』の版本が二種類蔵されている。そのうち一本は『李卓吾先生批評三国志』と題するいわゆる「李卓吾本」である。封面に「聖嘆外書」・「嘉興九思堂藏板」と記されているが、実際には李卓吾乙本であり、京都大学人文科学研究所・フランス国家図書館蔵本と同版である。⁽¹⁾

もう一本は、巻一卷頭書名を『攷訂按鑑通俗演義三国志伝』と題する二十卷本で、巻一と巻六から巻十まであわせて六卷のみ残っている。封面・序文・目録などはすべて逸し、出版年や出版書肆名は不明である。巻一第一行の書名の横に作者名・編集者名・出版書肆名が記されるが、破損が大きく、「東原」／「古臨」／「三建 書」のみはつきりと読み取れる。本文の大部分は半葉全体が本文となっているが、二、三葉ごとに一半葉が上図下文になっている。行款は、半葉全体が本文の場合は十四行行三十二字で、上図下文の場合は十四行行二十三字である。（以降「九大20卷本」と称する。）

二〇一三年八月に筆者は九州大学附属図書館を訪れ、本館所蔵の李卓吾本を調査した。その際『九州大学附属図書館漢籍目録』を目ざし、本館に二十卷本の『三国志演義』が蔵されていることを知った。この本を実際に見たところ、これまで報告されていない新資料であることが分かった。帰京後、第十二回中国古代小説・戯曲文献暨数字化国際

研究会で発表するために、わずか二週間の慌ただしい中、「关于九州大学所蔵『三国志演義』两种」という一文を書いた。⁽²⁾（以降「二〇一三年前稿」と称する。）この二十卷本『三国志演義』について、筆者は二十卷簡本系「志伝グループ」に分類した後、次のように述べた。

九大20卷本一定是很接近于诚德堂本的一本。而且，九大20卷本的插图方式与诚德堂本很相似，因此，可以说，九大20卷本与诚德堂本有较近的关系。

しかしこの時は学会開催までわずかな時間しかなく、新資料のニュース性を重視したため、十分な調査と考察を行っておらず、とりあえずの結論であるに過ぎない。

程国賦・鄭子成は「日本九州大学蔵『攷訂按鑑通俗演義三国志伝』考」⁽³⁾（以降「程文」と称する）において、九大20卷本をとりあげ、その本文について、

综合以上关于九大20卷本现存六卷与其他版本的对比，九大20卷本不是一个拼凑而成的版本，属于魏安所说的D1分支，亦即中川谕所说的二十卷简本系统中的志传小系统，与朱鼎臣本、诚德堂本、忠正堂本、乔山堂本、天理藏本以及黄正甫本关系密切。

と述べている。また画像について、「九大20巻本此图之所以能超越诸多建本，应是取法周日校本的插图以及围绕则目内容绘制插图的方式。」と述べ、「張飛怒鞭督郵」の場面の画像を例にして、「在造景、人物刻画方面达不到那般精细，但整体构思却是一致的。」と九大20巻本と周日校本の挿図の類似性を主張している。

周文業「从日本九州大学藏朱鼎臣本看『三国演義』简本志传小系列演化」^(四)では、筆者の二〇一三年前稿を紹介する一方、程文の結論が筆者の二〇一三前稿の結論と同じであることを述べ、九大20巻本の画像が周日校本に似ているという指摘に反対している。そして巻一冒頭の署名について、「古臨」の下破損部分について、「冲懷 朱鼎臣」であると推測する。さらに「三建」は地名であり、「三建 書林」の下に来る書肆名はいくつかの可能性があると推測する。そして九大20巻本が朱鼎臣の編集である以上、九大20巻本といわゆる朱鼎臣本との関係について、本文のを比較した後、「应该是九州本在前，朱鼎臣本在后」と述べる。

以上三篇の先行研究は、いずれもそれぞれ問題があると思われる。筆者の二〇一三年前稿は慌ただしい中で執筆したものであり、改めて考察しなおす必要がある。程文は、九大20巻本の本文についてはただ簡本系「志伝グループ」に属すると述べるのみであり、この点は正しいものの、筆者の二〇一三年前稿の結論を超えるものではない。また九大20巻本の画像について、周日校本と密接な関係があると述べている。周日校本は繁本二十四巻系に属する版本であり、簡本系の九大20巻本とは系統を大きく異にし、文章・内容もその差は大きい。また周日校本の画像は各則ごとに見られ、形式も前後二つの半葉をあわせて

○九大20巻本卷一「劉玄德斬寇立功」

一枚の画像となり、この点でも九大20巻本と大きく異なる。さらに検討する余地がある。巻一冒頭の署名については、「三建書林」を「劉龍田喬山堂」だとする。実際のところ「三建」は地名であり、「三建書林」は「三建」地域にある「書林」の意味であって、書肆名そのものではない。これが「劉龍田喬山堂」である可能性は排除しないが、さらに別の可能性も考えられよう。周文業氏の意見は、筆者は概ね同意したい。しかし朱鼎臣本との関係については疑問が残る。

本稿は、以上三篇の研究に基づき、あらためて九大20巻本の本文と画像を検討し、九大20巻本の本文の性質・画像の特徴とこの本の『三国志演義』諸本変遷過程上の位置を考察しようとするものである。

二

筆者は二〇一三年前稿の中で、劉備・曹操・孫堅の若い頃のエピソード（少時説話）があることによつて、九大20巻本が簡本「志伝グループ」に属すると判断した。しかし最近の筆者の研究によつて、いくつかの『三国英雄志伝』にも少時説話が存在することが分かった。よつて少時説話の有無だけで「志伝グループ」に属するのか「英雄志伝グループ」に属するのかの判断はできない。そこで、少時説話以外の文章から、改めて九大20巻本が属する系統を判断したい。

劉備・関羽・張飛は、黄巾賊を討伐するために盧植のもとにやつてきたが、盧植は讒言に遭い、捉えられていた。劉備たち三人は致し方なく、涿郡に帰ることにした。その途中、官軍が黄巾賊に打ち負かされて（五）いるところに出会った。

周曰校本 ^(六)	余象斗本 ^(七)	朱鼎臣本 ^(八)	楊美生本 ^(九)	九大20卷本
行無 二日，忽聞山後喊聲大震，殺氣遮天。玄德引關張縱馬，上高岡望之，見漢軍大敗，後面漫山塞野，黃巾蓋地而來，旗幡大書 天公將軍。玄德曰，「此必是張角也。可速戰之。」三人飛馬引軍，噪鼓而出。張角正殺敗 董卓，乘勢趕來，忽見山背後一彪人馬飛出，當先玄德，左有關公，右有張飛衝殺，角軍大亂，趕追 五十餘里，救了董卓回寨。	行 到二日，忽聞山後喊聲大舉，殺氣遮天。玄德引關張縱馬，上高岡望之，見漢兵大敗，後面漫山塞野，蓋地而來，旗幡大書 天公將軍。玄德曰，「此必是張角也。可速戰之。」三人飛馬引兵，鼓譟而出。張角正殺敗 董卓，乘勢趕來，忽見山背後一彪人馬飛出，當先玄德，左有關羽，右有張飛衝殺，出，角軍大亂，趕退五十餘里，救了董卓回寨。	行 到二日，忽聞山後喊聲，玄德見漢軍大敗，賊兵趕殺來。	聲，忽聞山後喊玄德縱馬，上高岡望之，見官軍大敗，賊陣中乃天公將軍旗號。玄德曰，「此必是張角也。可速戰之。」三人飛馬出，張角正敗 董卓，乘勢趕來，玄德領關張衝殺，	行 到二日，忽聞山後喊聲，玄德見漢軍大敗，賊兵趕殺來。
了董卓回寨。	了董卓回寨。	了董卓回寨。	了董卓回寨。	了董卓回寨。

この例を見ると、簡本系の朱鼎臣本と楊美生本の文章は、繁本系の周曰校本と余象斗本に比べて簡略になっている。しかし簡略になった文章は、朱鼎臣本と楊美生本とで多少の違いがある。たとえば、朱鼎臣本で「玄德見漢軍大敗」となっているところが、楊美生本では「玄德縦馬上高岡望之，見官軍大敗」となっている。他にも、朱鼎臣本の「三人飛殺進」は、楊美生本では「三人飛馬而出，張角正敗董卓，乘勢趕來」である。このように、朱鼎臣本と楊美生本はともに簡本系に

属する版本であるが、文章にいささか違いが見られる。これがすなわち「志伝グループ」と「英雄志伝グループ」との違いである。そこで九大20卷本の文章を見てみると、楊美生本よりも朱鼎臣本に近く、「玄德見漢軍大敗」・「三人飛馬殺進」という文字が見える。このことから、九大20卷本は簡本系の「志伝グループ」に属する版本であると考えられる。

この例は「志伝グループ」の文章が「英雄志伝グループ」よりも短

くなっている。一方で「志伝グループ」の文章が「英雄志伝グループ」よりも長くなっている例もある。徐庶は劉備と別れて曹操のもとに行く時、劉備に諸葛亮の名前を告げた。劉備は「臥龍」が諸葛亮で

あることを知って、隆中の諸葛亮の草庵にかけようとしていた。その時司馬徽が訪ねてきたので、劉備は司馬徽に諸葛亮がどのような人物なのかを尋ねた。

○九大20巻本 卷七「劉玄德三顧諸葛亮」

周曰校本	余象斗本	朱鼎臣本	楊美生本	九大20巻本
微曰「其人乃瑯琊郡人也。博陵崔州平、潁川石廣元、汝南孟公威并徐元直為友甚密，常一處學業。此四人 務於其人之智也。其四人務 精熟，惟孔明獨觀其大畧，每晨夜相隨，孔明自抱膝長嘯，而指四人曰『汝等仕進，可至刺史郡守也。』衆皆問孔明其志若何，孔明但笑而不答，可見其人之志了。」玄德曰「何潁川多賢乎。」	微曰「其人乃瑯琊郡人也。博陵崔州平、潁川石廣元、汝南孟公威并徐元直為友甚密，常一處學業。此四人唯孔明獨觀大略，可見 純粹其 精熟，惟孔明大畧，自抱膝長笑，而指四人曰『汝等仕進，可至刺史郡守也。』衆都問其志若何，孔明但笑而不答。此可見其人之志也。」玄德曰「何隱多矣哉。」	微曰「其人與博陵崔州平、潁川石廣元、汝南孟公威、徐元直為友甚密，常一處學業。此四人 各務 精熟，惟孔明獨觀大畧，抱膝長笑，曰『汝欲仕進，可至刺史郡守也。』衆都問其志若何，孔明笑而不答。此可見其志也。」玄德曰「潁川多矣哉。」	微曰「此人與博陵崔州平、潁川石廣元、汝南孟公威并徐元直為友，一處學業。此四人 務 在精熟，惟孔明獨觀大畧，抱膝長吟。」 曰「潁川何多賢士哉。」	微曰「此人與潁川石廣元、汝南孟公威、元直為友，一處學業。此四人 各務 精熟，惟孔明獨觀大畧，抱膝長笑，曰『汝等仕進，可至刺史郡守。』衆問其志若何，孔明笑而不口，可見其人之志。」玄德曰「潁川賢哉。」

この例を見ると、簡本系の朱鼎臣本・楊美生本・九大20巻本の文章は、繁本系の周曰校本・余象斗本より短くなっている。さらに細かく見ると、朱鼎臣本と九大20巻本の文章は楊美生本よりも少し長く、『汝欲仕進，可至刺史郡守也。』衆都問其志若何，孔明笑而不答。

可見其志也。」という数句があるが、楊美生本にはそれがない。これも簡本系の「志伝グループ」と「英雄志伝グループ」の文章の違いである。この例においても、九大20巻本の文章が朱鼎臣本と大差なく、楊美生本と多少の違いが見られるのであるから、九大20巻本はやはり

簡本系「志伝グループ」に属することが確かめられる。

では、簡本「志伝グループ」の中で、九大20巻本はどのような位置にあるのだろうか。

次の例を見てみよう。孫堅は建章宮で天象を見ていると、五色の光

が天に向かって輝いているのが見えた。その光の起こるところを探していると、古井戸から光が立ち上っているのを見つけた。孫堅は兵士に古井戸の中を浚わせると、ひとつの玉璽が見つかった。

○九大20巻本 卷一「袁紹孫堅奪玉璽」

朱鼎臣本	誠徳堂本	黄正甫本	九大20巻本
普曰「此傳国璽也。春秋時，楚人下和於荊山之下見鳳凰棲其上，進之。楚文王，解之，果見玉璽。秦始皇令良匠琢為玉璽，李斯篆八字其上，名曰，傳国璽。秦始皇崩，子嬰献于高祖皇帝。後至王莽篡逆，元后拽印并欄上去其一角，以金箱之。光武得此宝於宜陽，傳位至今。近聞十常侍作乱，劫少帝出北門山，回宮失此璽。今主公見此璽，殆天授。主公必有登九五之分。速回江東，別圖大事。」堅曰「次日推疾辞衆回軍。號令軍中勿得泄漏。如違者斬。」	普曰「此傳国璽也。春秋時，楚人下和於荊山之下見鳳凰棲于石上，進之。楚文王，解之，果見玉璽。秦始皇令良匠琢為玉璽，李斯篆八字于其上，名曰，傳国璽。秦始皇崩，子嬰將璽献于漢高祖。後至王莽篡逆，元后拽印于井欄上去其一角，以金箱之。光武得此宝于宜陽，傳位至今。近聞十常侍作乱，劫少帝出北門山，回宮失此璽。今主公見此璽，殆天授。主公必有登九五之分。速回江東，別圖大事。」堅曰「次日推疾辞衆回軍，号令軍中勿得漏泄，如違者斬。」	普曰「此傳国璽也。昔春秋時，楚人下和於荊山之下見鳳凰棲于石上，進于楚文王，解之，果見玉璽。秦始皇王命良匠為玉璽，李斯篆八字于其上，名曰，傳国璽。秦始皇崩，子嬰將璽献于漢高祖。後至王莽篡逆，元后擲璽于井上去其一角，以金箱之。光武得此，越于南陽，傳位至今。近聞十常侍作乱，劫少帝出北門山，回宮失此璽。今主公得此璽，乃天賜。主公必有登九五之分。速回江東，必成大事。」堅曰「吾亦知此實，正與汝合。次日遂推疾辞衆回軍，號令軍中勿得漏洩，如違者斬。」	普曰「化傳国璽也。昔春秋時，楚人下和於荊山之下見鳳凰棲于石上，進之。楚文王，解之，果見玉璽。秦始皇令良匠琢為玉璽，李斯篆八字于其上，名曰，傳国璽。秦始皇崩，子嬰將璽献于漢高祖。後至王莽篡逆，元后拽印于井不上去其一角，以金箱之。光武得此實于宜陽，傳位至今。近聞十常侍作乱，劫少帝出北門山，回宮失此璽。今主公得此璽，殆天授。主公必有登九五之分。速回江東，則固大事。」堅曰「吾足知此實，正與汝合。遂次日推疾辞衆回軍，號令軍中勿得漏泄，如違者斬。」

四種類の版本の文章を比較すると、程普が孫堅に玉璽のいきさつを

説明した後、孫堅のセリフの中で、九大20巻本と黄正甫本にはいずれ

も「吾足知此實，正與汝合」の文字があるが、朱鼎臣本と誠徳堂本にはない。この例から、九大20巻本の文章は黄正甫本に近く、九大20巻本と黄正甫本は密接な関係にあると考えられる。

さらに別の例を見てみよう。張松は曹操に四川の地図を献上しよう

としたが、曹操は張松を軽くあしらった。張松は失望し、劉備の仁徳を思い出して、荊州の劉備を訪ねることにした。趙雲・関羽が相次いで張松を出迎えると、張松は感激して、荊州に向かった。

○九大20巻本 卷十「張松還難楊修」

朱鼎臣本	誠徳堂本	黄正甫本	九大20巻本
松 大喜，上馬与玄德到城内。玄德設宴相待，並不提起西川一事，無非動問劉璋安否、并川中人物。松一應答之。松	松 大喜，上馬與玄德到城内。玄德設宴管待，並不提起西川之事，無非動問劉璋安否、并川中人物。松一應答之。張松	張松 大喜，即上馬與玄德同到荊州。玄德設宴款待，坐聞只說閑話，並不提起西川一事，無非動問劉璋安否、并問川中人物何如。松一應答之。張松心意，只等玄德開言問及川中兵事，然後說之。玄德與孔明並不提起此一節事。松見並不問及西川，乃先言曰「今皇叔守荊襄，還有幾郡。」孔明便答曰「荊州乃暫借東吳的，每七使人來此取討。目今只為皇叔是女婿故，權且安身耳。」松曰「今東吳借安身耳。」松曰「今東吳占據六郡及八十一州，民殷國富，由且貪心不足耶。」龐統乃曰「吾主乃漢朝皇叔，反不該占據州郡。其地皆漢之蠱賊，以霸道居之，惟智者觀之，則不平焉。」玄德曰「二公休焉。」	張松聞說大喜，即上馬與玄德同到荊州。玄德設宴管待，坐聞只說閑話，並不提起西川一事，無非動問劉璋安否、併問川中人物何如。松一應答之。張松心意，只等劉玄德開言問及川中兵事，然後說之。劉玄德與孔明並不提起此一節事，張松見不動問及，乃先言曰「今皇叔守荊襄，還有幾郡。」孔明便曰「荊州乃暫借東吳的，每七使人來此取討。目今乃為是女婿故，權且安身耳。」張松曰「東吳目今占據六郡及八十一州，民強國富，由且自不知足耶。」龐統乃曰「吾主乃漢朝皇叔，反不該占據州郡，其地皆漢之蠱賊，以霸道居之。惟智者觀之，則不平焉。」劉皇叔乃曰「二公休焉。」
玄德曰「二公休焉。」	玄德曰「二公休焉。」	玄德曰「二公休焉。」	玄德曰「二公休焉。」

密接な関係にあることを示している。筆者は二〇一三年前稿の中で、「九大20巻本与誠德堂本有较近的關係」と述べた。さらに朱鼎臣本を加えて、もう一度その例を見てみよう。青州太守龔景は黄巾賊に攻められ、救援を求め、劉焉は鄒靖に劉備を連れて青州を助けに行かせた。劉備・関羽・張飛は三方から攻めると、賊軍は敗退した。

言， 吾有何德，敢望 高言，	位而守	位， 而想守是城池南面以視人	位， 而想守是城池南面以視人
乎。」	乎。」	乎。」	乎。」

[illegible]

字の後、黄正甫本は「殺出、賊衆大潰迹散」とあるが、九大20巻本も合わせてその他の版本はみな「助戦、勦戮極多、餘衆散走」となっている。

いて、黄正甫本のみが異なっている。黄正甫本にはさらに「皆與公孫瓚師事庠植」という文字が見えるが、その他の四本はみな「與植一面之交、欲往」となっていて、黄正甫本とは異なっている。

さらに次のような例が存在する。劉備は劉表を頼って荊州に行った。

劉表は跡継ぎ問題を劉備に相談すると、劉備は劉琦を跡継ぎにして、長幼の序を乱すべきではないと告げた。蔡瑁はそれを聞いて劉備を深く憎み、劉備を殺そうと考えた。伊籍が蔡瑁の計略を察知し、こっそりと劉備に告げた。

○九大20卷本 卷六「玄徳躍馬跳檀溪」

朱鼎臣本	誠徳堂本	天理図本	黄正甫本	九大20卷本
伊籍把盞至玄徳前，以目視之曰「請更衣。」玄徳会其意，待籍把遍盞 拍 起如 側。 尹籍於後園等与玄徳曰「城外東南北 皆有軍馬，惟西 可走。使君急從後 逃 去，勿 退。	伊籍把盞至玄徳前，以目示之曰「請更衣。」玄徳会其意，待籍把遍盞 推起如 側。 尹籍于后園等与玄徳曰「城外東南北 皆有軍馬，惟西 可走。使君急從後 遁去，勿遲。	伊籍把盞至玄徳前，以目視之曰「請更衣。」玄徳会其意，待籍把遍盞 推入如 側。 伊籍于後園等與玄徳曰「城外東南北 皆有軍馬，惟西 可走。使君急從後 遁去，勿遲。	伊籍把盞至玄徳前，以目視之曰「請更衣。」玄徳会其意， 便 推起 往 側。 伊籍于後園等謂玄徳曰「今日蔡瑁欲害使君， 東南北 皆有軍馬，惟西門可走。使君走， 恐蔡瑁知之，急難脫身。 瑁定計 多日矣。」	伊籍把盞至玄徳前，以目示之曰「請更衣。」玄徳会其意，待籍把 盞□ 推起如 側。 尹籍于後園等與玄徳 云「城外東 南北 有軍馬，惟西 可走。使君急從後而逃 去，勿遲慢。
定計已多日矣。」	定計 多日矣。」	定計 多日矣。」	身。 瑁定計 多日矣。」	身。 瑁定計 多日矣。」

この例を見ると、「玄徳会其意」という文字の後、九大20卷本などにはいづれも「待籍把遍盞」という文字が見られるが、黄正甫本にはない。その後、伊籍が劉備に話すセリフの中で、黄正甫本のみ「今日蔡瑁欲害使君」という文字が見られるが、その他の本にはない。この例におけるこの二箇所は、九大20卷本が黄正甫本と異なるところである。一方で九大20卷本と黄正甫本にはいづれにも「恐蔡瑁知之，急難脱身」という文字があるが、朱鼎臣本・誠徳堂本・天理図本にはない。ここは九大20卷本の文字と黄正甫本が一致している。

以上の四つの例のように、九大20卷本の文章は、あるところでは黄正甫本に一致し、またある部分では黄正甫本と異なり、その他の「志伝グループ」諸本の文章と一致する。これはどのように考えればいいのかであろうか。

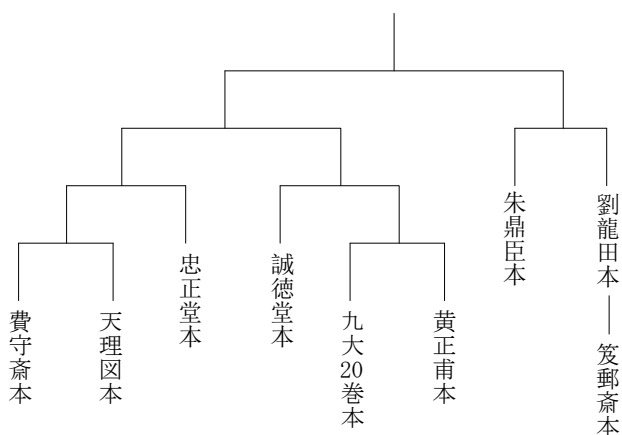
黄正甫本の文章は、「志伝グループ」諸本の中では少々特殊な性格を持つものであった。黄正甫本の文章の特殊性について、筆者は以前次のように述べた^{二四}。

(黄正甫本の文章は) 他の簡本系諸本とは異なる文章をしているところがいくつも見られる。そして黄正甫本の文章が他の簡本系諸本と異なるところは、ある個所では二十卷繁本系に近かったり、ある個所では繁本系を含め『三国志演義』すべての版本と異なるまったく黄正甫本独自の文章となっている。そして前者は簡本系の比較的古い形を留めていると思われ、繁本系から簡本系が分化している過程をある程度示唆しているのではないかと考えられる。そして後者は簡本系に属する版本の文章が改められていく側面を示していると考えられる。

九大20巻本が黄正甫本に近いところとその他の簡本系諸本と近いところのいずれをも持っているのであれば、九大20巻本は黄正甫本と簡本「志伝グループ」諸本との間に位置する版本であると考えられよう。これはすなわち、簡本「志伝グループ」諸本の中で、九大20巻本は朱鼎臣本や誠徳堂本よりもより黄正甫本に近いということであろう。もし黄正甫本の文章が簡本「志伝グループ」の文章から改変を経て成立したものであるならば、九大20巻本の文章は、「志伝グループ」の文章が改変されて黄正甫本の文章が成立する前の過渡期の性質を持っていることになる。

以上の考察から、簡本「志伝グループ」諸本の親疎の関係は、次の図のようになる。

三



続いて、九大20巻本の挿図について考察する。

九大20巻本の挿図は上図下文形式であるが、やや特殊でもある。一般的な上図下文本は全ページに挿図が挿入されるが、九大20巻本は数葉ごとに一幅の図が挿入されている。このような形式を持つ上図下文の版本には、九大20巻本の他、誠徳堂本がある。そのため筆者は二〇



【図01：九大20巻本08.08b挿図部分】



【図02：誠徳堂本08.09b挿図部分】



【図03：九大20巻本01.02b挿図部分】



【図04：黄正甫本01.03b挿図部分】

一三年前稿において、数葉ごとに一葉の上図下文の形式になっていることを根拠の一つとして、九大20巻本と誠徳堂本が密接な関係にあると述べた。^(一五)
 それでは、九大20巻本と誠徳堂本とで挿図の現れる場所・内容はどうな関係にあるのだろうか。
 程文においてすでに九大20巻本と誠徳堂本の図の題目を比較して、次のように述べている。^(一六)

現存六巻之中、両者内容相似者不过“刘玄德跃马跳檀溪”、“玄德庄上见诸葛”、“孔明说周公瑾”、“七星台诸葛亮祭风”四则，其余均有较大差异。还有九大20巻本卷一“董卓商议立陈留王”和誠徳堂本“董立陈留为帝”，图题也很相似。

程文の見解は基本的には正しい。図の題目が似ている五幅のうち、九大20巻本の「孔明説周公瑾」と誠徳堂本の「諸葛参見周瑜」の図像は比較的似ている(図01・02)。いずれも三人の人物が描かれており、一人は諸葛亮、一人は魯肃、一人は周瑜で、三人はみな屏風の前にいて、左側の諸葛亮と中央の魯肃は周瑜の方を向き、右側の周瑜は諸葛亮と魯肃の方を向いている。ただし九大20巻本の「孔明説周公瑾」の図像は三人とも椅子に座っているが、誠徳堂本の図像は中央の魯肃が立っている。その他の図題が似ている図像は、両者の間で差が大きい。九大20巻本と誠徳堂本はいずれも「数葉一幅」の上図下文方式ではあるが、しかし挿図の内容は大きく異なっている。挿図について言えば、この二本は密接な関係にあるとは言いがたい。
 文章の内容については、九大20巻本と黄正甫本が比較的近い関係にあった。では図像についてはどうか。



【図05：九大20巻本09.22a挿図部分】



【図06：黄正甫本09.22a挿図部分】

黄正甫本は全ての葉で上図下文であり、形式が九大20巻本と異なる。中にはよく似た図題になっているものもある。たとえば、九大20巻本の「□□□斬寇立功」と黄正甫本の「關羽張飛斬賊建功」(図03・04)は、九大20巻本の図題の前四文字が破損して明確ではないけれども、意味は大差なからう。両本の図像は、中央に馬に乗った張飛が槍を持って左側の賊將を斬ろうとし、右側の一人(劉備?)がその様子を見ている。構図は全く一致している。

図題はいささか異なるが構図はおおよそ一致する例もある。たとえば、九大20巻本の「劉玄德智娶孫夫人」と黄正甫本の「甘露寺玄德拜國太」(図05・06)は、挿図の題目は少々異なっている。(劉備は喬國老と呉國太に拝謁し、呉國太が劉備の姿を見て、孫夫人との結婚を認める。両本の図題は異なるが、その示す場面は必ずしも異なるもの

ではない。)両本の図像を見ると、右側に呉國太が椅子に座り、真ん中に喬國老が立ち、左側に劉備がいる。呉國太は右を向き劉備と喬國老を見ている。劉備と喬國老は左を向いて呉國太を見ている。三人の背景もほぼ同じである。ただ九大20巻本の図像では劉備は立ったままお辞儀をしているが、黄正甫本では劉備は跪いている。劉備の仕草に多少の違いはあるものの、全体としてはよく似た図像であろう。このように、九大20巻本と黄正甫本の図像は、比較的よく似ているものがいくらかある一方で、図題が同じあるいは似ていても構図が全く異なるものも大変多い。図像について言えば、九大20巻本は必ずしも黄正甫本と密接な関係にあるわけではない。

程文は「九大20巻本此圖之所以能超越諸多建本，應是取法周曰校本の插图以及围绕则目内容绘制插图方式」と述べ、そして「張飛鞭督郵」の図像を例として、「虽然九大20巻本の插图艺术水准比不上周曰校本，在造景、人物刻画方面达不到那般精细，但整体构思却是一致的」と、九大20巻本と周曰校本の図像の類似性を主張する。

周知のように、周曰校本は繁本二十四巻系の一つであり、九大20巻本とは系統が全く異なる。この点からも筆者は程文に対して疑問がある。周曰校本と九大20巻本の図像は、結局のところどのような関係にあるのだろうか。

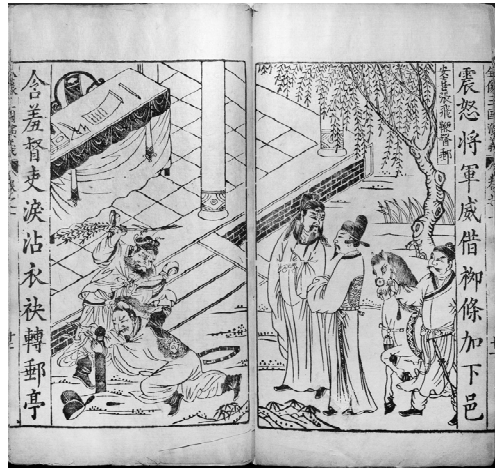
まず程文が例として用いている「張飛怒鞭督郵」の場面の図像(図07)を見てみよう。

九大20巻本の「張飛怒鞭督郵」の図像は、左側に督郵が両手を縛られて木の上から吊り下げられ、中央に張飛がいて鞭を手に持って督郵を打ち、右側に二人の人物がいる。(一人は劉備であろうが、もう一人は長い髭を持っていないので関羽ではないだろう。)周曰校本の「張飛怒鞭督郵」の図像(図08)は、左側下方に督郵が跪き、馬をつ

なぐ柱に両手を縛られ、張飛が右手に柳の枝を持って左手で督郵の頭を押さえ付け、右側に劉備と関羽、さらに馬を牽く人物がいる。背景の左側に部屋があり、その中に机と紙・筆がある。背景の右側には一本の木が立っている。そして周曰校本の図像は九大20巻本に比べてきめ細かく精細である。両者の図において張飛と督郵の立ち位置が大きく異なり、構図が似ているとは思えない。両者の図像は大きく異なっており、九大20巻本の図像は「取法周曰校本的插图」とはとも言えないのではないのか。その他の版本の「張飛怒鞭督郵」の場面の図像を見てみると、たとえば朱鼎臣本の図像(図09)は、図の左側に木に縛り付けられた督郵が、右側に張飛がいて、張飛は右手に鞭を持って督郵を打とうとしている。張飛の右側にはさらに人物は描かれていないが、この場面の主たる人物である張飛と督郵の位置が九大20巻本と一致している。図像の精細さも周曰校本よりは大きく劣る。このように、



【図07：九大20巻本01. 6a挿図部分】

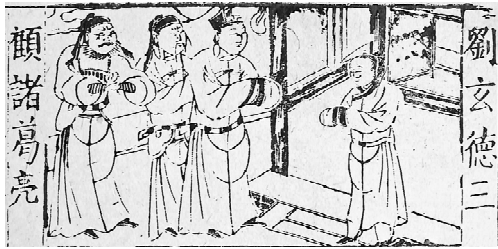


【図08：周曰校本01. 11b, 12a】

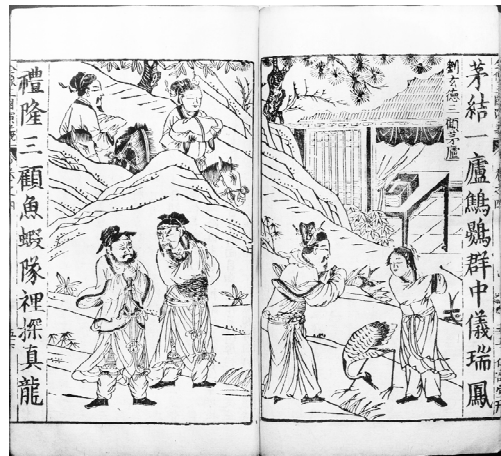


【図09：朱鼎臣本01. 08b挿図部分】

九大20巻本の図像は、周曰校本よりも朱鼎臣本の方がはるかに近い。確かに、周曰校本の図像の中には九大20巻本とよく似たものがないわけではない。例えば、「劉玄德三顧諸葛亮」の図像(図11)は、構図が比較的似ているよう。九大20巻本の図像(図10)は、左側に劉備・関羽・張飛が立っており、右側に一人の童子がいて、背景は諸葛亮の草庵である。周曰校本の「劉玄德三顧茅廬」の図像は、左側に劉備・関羽・張飛が立っており、右側に童子が立ち、そばに鳥が一羽いる。背景は諸葛亮の草庵と山で、山の間を二人が馬に乗って進んでいく。両本の図像で、劉備たち三人や童子の立ち位置はほぼ同じで、ただ周曰校本の図像の方が九大20巻本よりはるかに精細である。さらに鄭少垣本の図像(図12)を見ると、図題は「玄德扣門童子出應」であるが、図像は、左側に劉備・関羽・張飛が立っており、右側に童子がいる。



【図10：九大20巻本07.02a挿図部分】



【図11：周曰校本04.55b, 56a挿図部分】



【図12：鄭少垣本07.03a挿図部分】

図題は異なっているものの、構図は九大20巻本と大差なく、周曰校本よりも遥かに似通っている。

このように、周曰校本の図像の中には、いくつかは九大20巻本と比較的似ているものも存在している。そもそもある一つの特定の場面の絵を描いたならば、たとえそれぞれ別に描いたとしても、たまたま構図が似ているということは、それほど不思議なことではあるまい。

一方で、九大20巻本と周曰校本とで全く別の図像になっているか、構図が全く異なっている例もあり、むしろこのような例の方が多い。たとえば、九大20巻本の「博望坡大敗夏侯惇」の図像(図13)は、三人の人物と四台の車が描かれ、車にはそれぞれ三つの袋が載せられている。それに対し周曰校本の「諸葛亮博望焼屯」の図像(図14)では、山の間が燃えさかり、その中を一人の人物(夏侯惇)が馬に乗って逃げて行き、その後を二人の人物が追っている。左側上には三人がいて、

夏侯惇が逃げて行く様子を見ている。「博望焼屯」の場面の図像は、九大20巻本と周曰校本とで大きく異なっている。さらに鄭少垣本の図像(図15)を見ると、図題は「火燒博望魏軍大敗」で、図の中には三人と三台の車が描かれ、それぞれの車には三つの袋が載っている。三人の人物の顔の向きは、九大20巻本と全く同じである。九大20巻本と比べて車の台数が一台少ないが、構図は非常に似ている。

さらにいえば、九大20巻本は上図下文の形式だが、周曰校本は見開き二枚の半葉をあわせて一枚の図像となる。両本の図像の形式も大きく異なっている。

以上のことから、筆者は、九大20巻本の図像は周曰校本に基づいて成立したものではないと考える。

では、九大20巻本の図像はどのような版本に基づいて作られたのだろうか。



【図13：九大20巻本07. 12b挿図部分】



【図14：周日校本04. 81b, 82a挿図部分】



【図15：鄭少垣本07. 19a挿図部分】

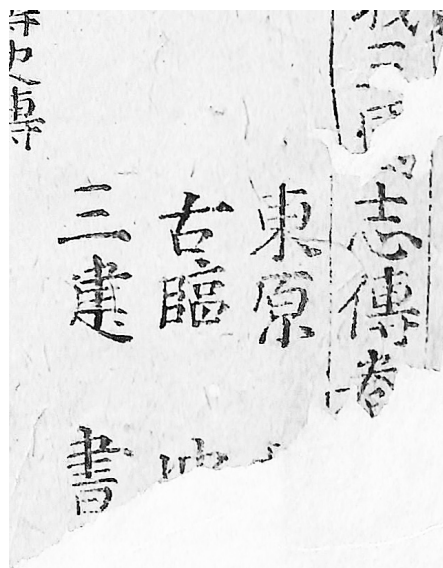
現存する『三国志演義』の版本の中で、九大20巻本の図像と完全に一致するものは存在しない。簡本系統の中で、「志伝グループ」・「英雄志伝グループ」の上図下文形式の諸本で、いくつかの図像は九大20巻本とよく似た図像も存在するが、大部分は必ずしも似ているわけではない。二十巻繁本系統の中では、鄭少垣本の図像で九大20巻本の図像に似ているものは、他の上図下文形式の版本よりもいくらか多い。しかしそれでも完全に一致するわけではなく、構図が異なる図像も多く見られる。現存する上図下文形式の諸本を見る限り、九大20巻本の図像は、複数の版本の図像から寄せ集めて作られたものようだ。あるいは、現在ではもはや存在していない版本の図像に基づいているのかもしれない。

四

最後に巻一冒頭の著者名・書肆名、すなわち題署の問題について考えてみたい。

九大20巻本巻一第一葉a面の下半分は破損しており、多くの文字を見ることができない。一行目の書名も、「攷訂按鑑通俗演義三國志傳卷」までは読めるが、「卷」字以下は見えない。第二行、すなわち題署の一行目は、ただ「東原」のみ見え、それ以下ははっきりしない。三行目（題署の二行目）は、「古臨」二文字があり、その後一文字の空白があつて、さらに次の字の上半分のみ見える。おそらく「冲」字であろうと思われる。四行目（題署の三行目）は「三建書」のみ見え、以下は分からない。

この巻一卷頭の題署の問題について、周文業氏がすでに見解を示し、筆者もほぼ周氏の考えに同意したい。ただ周氏は署名の一行目につい



【図16：九大20巻本01.01a】

題署部分拡大

て、「東原」肯定は「東原 羅貫中」、各種版本都如此、没有异议」と述べている。筆者も基本的にそれで問題ないと考える。「東原」の下には『三国志演義』の作者「羅貫中」の名前があるだろう。しかし「東原 羅貫中」の五文字と一文字の空白では、題署部分の記述が後述するとおりならば、字数が二行目・三行目と合わなくなってしまう。そこで他の版本の状況を見てみよう。

葉逢春本 ^(二八) …東原	羅	本	貫中	編次
余象斗本…東原	貫中	羅道本	編次	
鄭少垣本…東原	貫中	羅	本	編次
誠徳堂本…東原	羅	本	貫中	編次

九大20巻本と同一形式の題署になっている版本は、この四本のみである。この形式を取る版本は、実はそれほど多くない。この四本の記

載を見ると、余象斗本のみ「羅道本」となっている。『三国志演義』の作者を「羅本、字は貫中」とするものは比較的多いが、「羅貫中、字は道本」あるいは「羅道本、字は貫中」とするものは、他には見られない。したがって筆者は、九大20巻本の著者名が余象斗本のようになっている可能性は少ないと考える。だとすると、九大20巻本の「東原」以下は、二つの可能性が考えられよう。すなわち、一つは「東原 羅 本 貫中 編次」、もう一つは「東原 貫中 羅 本 編次」である。九大20巻本の著者名の「東原」二文字と一文字分の空白のあとをよく見てみると、「」のような筆画とその左側に一本の短い線が見える。筆者は、これは「貫」字の一部分だと判断したい。だとすると、九大20巻本の署名一行目「東原」の下は、おそらく「貫中 羅 本 編次」であろうと考えられよう。

周文業氏はさらに「古臨」は「古臨 冲懷 朱鼎臣」と述べる。九大20巻本の題署二行目をよく見てみると、「古臨」二文字と一文字分の空白の後、ある一字の上半分が残っており、おそらく「冲」字であろうと判断できる。だとすると周文業氏が述べるように、署名二行目は「古臨 冲懷 朱鼎臣」の可能性が大きいだろう。しかし周文業氏はこの「古臨 冲懷 朱鼎臣」という判断から、九大20巻本を朱鼎臣本の一つと考え、九大20巻本と従来「朱鼎臣本」と呼ばれていたハーバード大学燕京図書館所蔵「朱鼎臣本」と文字を比較し、「九州本在前、哈佛本在后、哈佛本是九州本の复刻本」と述べる。しかしすでに上述したように、九大20巻本と朱鼎臣本は、いずれも簡本「志伝グループ」に属するといえ、このグループ内において両本の文章は差異が大きい。そして両本は継承関係にあるのではなく、並列の関係にある。たとえ同一人物の編集・同一書肆の出版であっても、その二本が継承関係にあると容易に判断してはならないだろう。^(二九) 簡本「志伝グ

ループ」の中で、九大20巻本と朱鼎臣本はそれほど密接な関係にはない。

署名の三行目の「三建書」については、筆者は周文業氏の考えにさらに付け加えることはない。「書」字の下はおそらく「林」字で、「三建書林」で間違いあるまい。「三建」は地名で、建陽・建安・建瓯の三地区を指す。「三建書林」は『三建』の『書林』の意味であって、決して「三建書林」という一つの書肆の名前ではない。署名の「三建書林」の下にはどのような書肆名が続くのであろうか。確かに程文が述べるように、「喬山堂」もその可能性の一つであろう。しかしそれが唯一の可能性というわけではなく、「劉永茂」など劉氏が経営していた書肆名など、いくつも可能性は考えられるであろう。（周文業氏の文章中に詳しく説明がある。）

五

以上、九大20巻本『三国志伝』という版本の性質について論じてきた。この本の本文によれば、間違いなく簡本「志伝グループ」に属する版本であり、その中でも黄正甫本と最も近い関係にある。簡本「志伝グループ」の中で、黄正甫本の本文はやや特殊な性格を持っているとすれば、九大20巻本は黄正甫本とその他の簡本「志伝グループ」諸本の中間に位置すると言えよう。しかし九大20巻本と黄正甫本は継承関係ではなく、並列の関係にある。この点で、二〇一三年前稿の中で指摘した「九大20巻本と誠徳堂本有較近的关系」という考え方は修正しなければならない。

九大20巻本の挿図は、数葉ごとに一幅が上図下文となる形式で、この点では誠徳堂本の挿図の形式と同じである。しかし図像の内容は、

九大20巻本と誠徳堂本では大きく異なっている。九大20巻本の図像のいくつかは、二十巻繁本系の版本と似ていることがあるが、しかし完全に一致するものはない。いくつかの版本から寄せ集めて作られたようにも思える。挿図の問題は、あらゆる上図下文形式の版本の図像を大局的に捉えて考察していく必要があるだろう。そうすることで、挿図の伝播の様子が解明できると考える。

九大20巻本は、筆者が二〇一三年に九州大学附属図書館を訪問した際、偶然発見した版本である。その後、これまで知られていなかった『三国志演義』の版本が相次いで発見されている。その中でも最も驚嘆させられたのは、スイス・ジュネーブのマルタン・ボドメール財団図書館に蔵される葉蓬春本四十四葉であろう。⁽¹⁰⁾ その他新発見の『三国志演義』版本には、ドイツ・ワイマールのアンナ・アマリア公爵夫人図書館所蔵の美玉堂刊『三国英雄志伝』や、遼寧図書館所蔵の十二巻本松盛堂刊『三国英雄志伝』、張青松氏所蔵の致和堂刊『三国英雄志伝』などがある。これら新発見資料は、スイス葉蓬春本を除けば、大部分は清刊の簡本である。これらは刊行年が遅く、かつ文章が簡略化されているが、しかし『三国志演義』の版本変遷過程と流行状況を示す価値の高い資料である。今後も従来知られていない新資料が次々と発見されることであろう。刊行年の早晩や文章の繁簡に関わらず、これら新発見資料に対して真摯に向き合わなければならないまい。そうすることによって、『三国志演義』版本に関するあらゆる問題点を解明することができるのである。

《注》

(一) 中川論『李卓吾先生批評三国志』について（『三国志研究』第十一号、三国志学会、二〇一六年）。

(二) 『第十二届中国古代小说、戏曲文献暨数字化国际研讨会论文集』(復旦大学語言文化研究所、二〇一三年)。

(三) 『文献』、二〇一九年三期。

(四) 『中国小说论坛论文集』(山東大学文学学院、二〇一九年)。

(五) 中川論『「三国志演義」版本の研究』(汲古書院、一九九八年)。この例は拙著において、簡本系がさらに二つのグループに分かれることを示すために使用した個所である。

(六) 『新刊校正古本大字音釈三国志通俗演義』十二卷。周曰校本には甲本・乙本・丙本の区別がある。甲本は中国社会科学院文学研究所蔵(巻六・七・九)、乙本はイエール大学図書館・北京大学図書館(巻一・二・六・九・十二)蔵。丙本は名古屋蓬左文庫・国立公文書館等蔵。中川論「周曰校刊『三国志演義』の甲本・乙本・丙本」(『林田慎之助博士傘寿記念三国志論集』(三国志学会、汲古書院、二〇二二年)参照。本稿における周曰校本の本文と画像の引用は、イエール大学図書館所蔵の乙本を用いる。

(七) 『音釈補遺按鑑演義全像批評三国志伝』二十卷。建仁寺両足院(巻一・八・十九・二十)・ケンブリッジ大学図書館(巻七・八)・ドイツ・ヴェルテンベルク州立図書館(巻九、十)・オックスフォード大学図書館(巻十一・十二)・大英博物館(巻十九・二十)蔵。本稿における余象斗本の本文と画像の引用は、国家図書館出版社出版の影印本『日英徳蔵余象斗刊本批評三国志伝』、二〇一三年)を用いる。

(八) 『新刻音釈旁訓評林演義三国志史伝』二十卷。ハーバード大学燕京図書館・ロンドン博物院図書館蔵。本稿における朱鼎臣本の本文と画像の引用は、国家図書館出版社出版の影印本(『美国蔵朱鼎臣輯本三国志史伝』、二〇一四年)を用いる。

(九) 『新刻按鑑演義全像三国英雄志伝』二十卷。大谷大学図書館蔵。本稿における楊美生本の本文の引用は、大谷大学図書館蔵本の複写を用いる。

(一〇) 『新刻京本補遺通俗演義三国志伝』二十卷。台湾故宮博物院・石川武美記念図書館成實堂文庫・東北大学附属図書館(巻一・六)蔵。本稿における誠徳堂本の本文と画像の引用は、国家図書館出版社影印本(『北平旧蔵熊清波誠徳堂刊本三国志全伝二十卷』、二〇〇五年)を使用する。

(一一) 『新刻攷訂按鑑通俗演義全像三国志伝』二十卷。中国国家図書館蔵。本稿における黄正甫本の本文と画像の引用は、北京図書館出版社影印再造善本(『新刻攷訂按鑑通俗演義全像三国志伝』、二〇〇四年)を用いる。

(一二) 「英雄志伝グループ」の楊美生本にもこの一句が見られる。黄正甫本の文章はやや特殊な性質を持っていて、その文章が他の志伝グループと異なる時、全く独自の文章であったり、「英雄志伝グループ」の文章と似ていたりする。黄正甫本は確かに「志伝グループ」に属する版本であるが、「英雄志伝グループ」と一定の関係があるかもしれない。この問題は、改めて考えてみたい。

(一三) 『新刻京本按鑑演義合像三国志伝』二十卷。天理大学附属天理図書館蔵。本稿における天理図本の本文の引用は、同館蔵本の複写を用いる。

(一四) 中川論「黄正甫刊『三国志伝』三考」(『三国志研究』第五号、二〇一〇年、三国志学会)。

(一五) 二〇一三年前稿は執筆時間の関係で、ただ九大20巻本と誠徳堂本が「数葉一幅」の形式が似ていることを述べるのみで、九大20巻本と誠徳堂本の画像とそれに基づく両本の関係については触れ

ていない。しかし程文は二〇一三年前稿の意図を曲解し、「両者の插图方式仅仅是“形似”，中川諭谓“九大20卷本的插图方式与诚德堂本很相似”的说法并不准确」と二〇一三年前稿を批判している。筆者は九大20巻本の挿図の具体的内容に言及していない以上、程文の批判は全く的外れである。

(二六) 程文が示す図の題目の比較表には誤りがある。すなわち、誠徳堂本巻一の図題を「卓立陳留為帝」としているが、実際は「董立陳留為帝」である。そして八十六ページの注釈(1)で、「誠徳堂本第一巻有缺叶，“曹操謀杀董卓不就私奔”一則之后的内容均缺失。」と述べている。しかし実際には、誠徳堂本巻一には欠葉はなく、「曹操謀殺董卓不就私奔」の一則の後、巻一の最後「袁紹孫堅奪玉璽」まで、内容も文章もすべて存在している。

(二七) 『新鍔京本校正通俗演義按鑑三国志伝』二十巻。国立公文書館・名古屋市蓬左文庫・尊経閣文庫蔵。本稿における鄭少垣本の図像は、国立公文書館蔵本の写真を用いる。

(二八) 『新刊通俗演義三国志史伝』十巻。スペイン・エスコリアル修道院蔵(巻一・二・四・十)。

(二九) 余象斗双峰堂は二度にわたって『三国志伝』を刊行しているが、それらは必ずしも継承関係にはない。注(五) 前掲拙著参照。

(三〇) 中山大学博士後の劉蕊氏によって、スイスの葉蓬春本が発見された。二〇一八年に筆者はドイツ・オーストリアで開催された第二屆世界漢学論壇に参加した際、劉蕊氏と面会し、劉蕊氏より『三国志演義』残本の写真を見せていただいた。筆者と上原究一氏とで鑑定したところ、この数十葉は葉蓬春本の残葉であることが分かった。そしてそれはスペイン葉蓬春本と同版であり、またスイス本の方がスペイン本よりも印刷が早い。嘉靖二十七年に刊

行された葉蓬春本が二種類、ヨーロッパに渡っていたことになる。劉蕊氏による一大発見である。

〔付記〕 本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)『『三国志伝』諸本の研究』による研究成果の一部である。